

「見えない」帝国から「見える」帝国へ
 - 『大いなる遺産』における教養小説の変容と植民地主義の問題 -

道木 一 弘

はじめに

十八世紀の末から十九世紀にかけて、ドイツを中心とするヨーロッパ各地で、人間の幼年期から青年期にかけての「成長」(*Bildung*)を描く小説が数多く現われた。教養小説 (*Bildungsroman*) と呼ばれる作品群である。その根底にあるのは、「人間性」(*humanity*) に普遍的な価値を置き、それに向けての自己完成の可能性を信じる啓蒙主義以来の伝統であり、チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1861) は、この流れを受け継ぐものとみなされている。

教養小説を包括的に分析したフランコ・モレッティは、これを主に十八世紀に書かれたものと十九世紀に書かれたものの二つに分け、前者を古典的教養小説と名付ける。¹ 彼によれば、古典的教養小説のテーマが、主に、分裂したものの融和、とりわけ社会と個人の有機的な結び付きであるのに対し、十九世紀の教養小説においては、その不可能性がテーマとなる。社会と個人の対立は克服し難いものとされ、物語の主人公は満たされないもう一人の自分を自らの「内部」に隠し持つことになるのである。

モレッティはそうした主人公の例として、スタンダールの『赤と黒』のジュリアン・ソレルと、『大いなる遺産』のピップを揚げ、ジュリアンが魅力的であるのに比べ、ピップはそうではないとする。そして、彼はその理由が、各々の小説が書かれた社会的背景の違いに起因すると考えるのである。ナポレオン戦争以降、大陸では旧勢力と新興勢力の衝突が続き、革命と戦争が繰り返されて、社会情勢は極めて不安定であったのだが、一方、イギリスでは労働運動の高まりにもかかわらず社会は比較的安定していたという。²

ヨーロッパの歴史を大きく捉えて論ずるモレッティの方法は説得力のあるものだが、教養小説という形式をヨーロッパという枠組みの中でのみ考えようとするがゆえの盲点を内包しているのも事実である。その盲点とは、紳士へのピップの欲望を可能にする「遺産」が、かつて彼が助けた脱獄囚マグウィッチによってオーストラリアからもたらされるという真実が、全く考慮されていないということである。換言すれば、モレッティに欠けているものとは、教養小説と植民地の係わりへの視点なのである。

この問題を考える上で参考になるのは、エドワード・サイードの指摘である。彼は『文化と帝国主義』の序論において、「文化」という概念を中心(メトロポリス)から周縁(植民地)に対する帝国主義的支配と、それに対する植民地側からの抵抗とその歴史的経験という二方向から捉えるべきであるとする。そして、小説こそこの問題を最もよく反映する文学ジャンルであるとし、最初に言及するのが『大いなる遺産』なの

である。³本論ではこうしたサイドの論点を踏まえつつ、教養小説と植民地主義の視点から、ピップの紳士への欲望とその挫折について、また彼に遺産をもたらすマグウィッチが意味するものについて考えたい。

1 ダミーとしてのピップ

紳士 (gentleman) になりたいというピップの欲望と、それを叶えてくれる匿名の人物からの「遺産」 (great expectations)。この二つが物語の発動と進展を可能にする要因である。一見唐突な両者の結び付きは、しかし「外在性」という一つの共通項によって成り立っている。遺産が彼の予期せぬ「外部」から突然もたらされるように、紳士への欲望は決してピップに初めから内在していたものではない。ハヴィシャム婦人の屋敷で出会った美しい少女エステラから彼に向けて発せられた侮蔑の言葉によって、彼の内部にその最初の毒の種が撒かれるのだ。彼女はピップを「卑しい労働者の少年」 (“common labouring boy”) と呼び、その「粗大な手」と「野暮ったい靴」を嘲笑うのだが、それは彼にとって修復し難い心の傷を残すだけでなく、さらに自分をそのように育てた姉とその夫ジョーに対する怒りと軽蔑を生み出すのである。

こうして幼いピップは、自分が「卑しい」労働者階級に属することへの自己嫌悪と、ハヴィシャム婦人とエステラによって象徴される「紳士」の世界への渴望によって無邪気な少年から苦悩する青年へと生まれ変わるのである。その直接の原因はエステラの言葉ではあるが、そのさらに背後にあるのはハヴィシャム婦人の憎悪である。似非紳士コンペysonによって結婚詐欺の被害者となり、父の遺産だけでなく自らの青春と心を失った彼女は、怒りと憎しみによって養女エステラを育て、彼女を通して社会に対する復讐を誓った。その結果、表面的な美しさとは裏腹に、邪険な冷酷さを身につけたエステラは、いわば婦人の憎悪を代行する人形 (ダミー) と化し、ピップはその最初の犠牲者として選ばれるのである。

つまり、ピップの「成長」 (*Bildung*) の根本にあるもの、自己嫌悪と紳士への渴望は、ハヴィシャム婦人の憎悪がエステラを介して彼の内部に移植されたものなのだ。その意味では、エステラだけでなくピップもハヴィシャム婦人の歪んだ欲望の代行者に他ならず、そのダミーと呼ぶことができる。しかも、ピップの場合、匿名の人物からの遺産とその人物の「強い願い」 (“desire”) によって「紳士として育てられる」ことを運命付けられるのである。後にこの人物は、かつてピップが助けた脱獄囚マグウィッチであることが判明するが、彼はピップから受けた「恩義」に報いるため、流刑地オーストラリアで罪を償い、その後働いて得た金を代理人を通して全てピップのもとへ送り届けていたのである。従って、ピップの紳士への欲望は二重の意味で「外在的」である。正に彼は、ハヴィシャム婦人の憎悪とマグウィッチの欲望を彼等に代わって生きる者、両者の欲望が合体した結果生まれた彼等の「子供」としての側面を有しているのだ。

ここで、この二人の人物、ハヴィシャム婦人とマグウィッチを背後でつなく第三の人物として、似非紳士コンペイソンの存在は重要である。ハヴィシャム婦人の父親は醸造業によって財をなした、いわば新興中産階級の典型であるが、この父が亡くなると、既に母を失っていたうら若きハヴィシャムがその財産を受け継いだのである。コンペイソンは彼女の異母弟と組んで彼女に近づき、「恋愛」を装って金を巻上げた拳句、最後は結婚式の当日に彼女の前から忽然と姿を消したのであった。

この顛末は、ピップの仕事上の同僚ハーバートによって事後的に語られるのだが、彼の父マシュウがハヴィシャム婦人の親戚で、その内情に通じているためである。ハーバートはこれを語るに際して、コンペイソンについて次のように述べている。

父の話だと、奴はその手のことにかげちゃ打ってつけの、いかにも派手好きな男だった。ただし、無知と偏見によらないかぎり、奴が紳士に間違われることは金輪際ありえない、と父は断言していた。というのも、この世が始まって以来、内面において紳士でない者は、品行においても紳士ではありえない、というのが父の信念だったから。(171)⁴

コンペイソンが「派手好きな男」(“showy-man”)であり、しかし「無知と偏見」によらない限り、この男を「紳士」と間違はずはないというマシュウの言葉は、単にコンペイソンの俗物性を非難するだけでなく、そのような人物に騙される者への批判でもある。換言すれば、コンペイソンが上辺だけの似非紳士であることを見抜けないなら、見抜けない者自身も同じく俗物だということである。事実、マシュウは、コンペイソンとの関係をハヴィシャム婦人にあらかじめ警告していたのだが、彼女はそれを聞き入れず、悲劇を招いたのである。

同じく、コンペイソンの外見に翻弄されるもう一人の人物がマグウィッチである。生まれながらにして社会の最底辺に生きることを運命付けられていた彼は、コンペイソンと出会うことで組織的な犯罪行為の片棒を担ぐことになる。その結果二人は逮捕され裁判にかけられるのだが、法廷に引き出された時、マグウィッチはコンペイソンの紳士然とした「外見」に目を見張る。しかも、その表面的な演出が結局裁判の方向を決定づけ、マグウィッチはコンペイソンの倍の刑期、14年を言い渡されたのである。

物語の終り近く、マグウィッチはこうした惨めな自分の過去をピップに語るのだが、それはコンペイソンの演出を見抜けなかった陪審と裁判官、さらには「外見」によって人を判断する当時の社会への糾弾でもある。こうして、似非紳士コンペイソンによって人生の辛酸をなめた二人の人物の憎悪と怒り、社会への復讐心がピップに取りつき、彼を紳士へと駆り立てるのだ。

2 「見える」紳士の呪縛

『大いなる遺産』という小説の中心的なメッセージは、先に引用したハーバートの父の言葉に簡潔にまとめられている。すなわち、紳士とは内面的な資質が重視されるべきであって、外見は副次的な問題に過ぎないということである。従って、ピップの紳士への欲望が、手や靴の形といった「外見」に対するエステラからの侮蔑に端を發し、遺産を得た彼が最初に行うことが、仕立屋に出向いて「紳士」にふさわしい衣服をこしらえることであるのは、彼こそが、この小説において批判される対象であることを端的に表わしている。一言でいえば、それは紳士を視覚化することへの批判、「見える」紳士に対する批判である。

このような批判が一つの小説として成立しうるということは、逆に考えれば紳士としての内面を伴わない似非紳士、「見える」紳士がヴィクトリア朝社会に溢れていたということだが、その背後にあるのは、「紳士」という言葉の持つ意味内容が極めて曖昧であり、ゆえにそれを分かりやすく視覚化したいという人々の意識であろう。実際、この言葉はイギリス社会の歴史的変遷を色濃く反映し、その定義は常に論争的であったのである。

狭い意味では、紳士とは貴族階級および郊外に広大な農地を保有しその地代によって生活する地主階級のことであった。しかし、この問題を詳細に論じたペネロピ・J・コーフィールドによれば、この言葉は、その始まりから、「社会的意味合い」と「道徳的意味合い」の二つの面をもち、「曖昧で伸縮自在な」言葉であった。⁵十八世紀に新興中産階級が登場してくると、この二面性にさらに拍車がかかり、経済力をつけた商工業者が自らを紳士と称し、上流階級の仲間入りをする一方、個人の道徳性や資質にのみ基礎づけられた人格的な紳士像が、文化的な文脈において主張されるようになったのである。その最初期の例として、コーフィールドはリチャード・スティールの次の言葉を引用している。

私が考える紳士の心というのは、勇敢にして信念をもち、感情的であり過ぎることがなく、優しさと同情心、さらに慈悲の心にあふれた人である。立居振舞に関して言えば、立派な紳士というものは、控えめだが内気ではなく、礼を失しない程度に気さくで愛想がよく、卑屈でない親切心と丁寧さをそなえ、陽気で快活だが騒々しくはない人物である。⁶

ここで示される人格を重視した紳士像は、ピップが一度は否定し、しかし物語の終わり近くで再発見するジョーの資質を彷彿とさせるものであり、かつ少なからぬ問題を含んでいるが、この点はまた後で取り上げる。

十九世紀に入ると、「紳士」という言葉は階級間の対立を緩和する装置として積極的に利用されるようになる。ロビン・ギルモアはヴィクトリア朝中産階級の確立期を

1840年から1880年とするが、上流階級が自らの非生産性、土地収入による有閑的生活スタイル（ダンディズム）に価値を置くのに対して、労働を重視する中産階級はそれを批判するようになる。こうした対立を解消するため、パブリック・スクールにおける「紳士教育」が導入されるのだが、その目的は、いわば粗野な新参者に対して旧来のエリート的価値観を教え込むことであったという。⁷一方、社会的上昇志向に駆られた中産階級にとっても、自分たちの子弟に上流階級の教育を受けさせることは利益になっており、彼等は大学してパブリック・スクールへ入学したのである。⁸

こうして、紳士という概念は階級の枠を超えて広く社会に行き渡るようになった。再びコーフィールドの言葉である。

従って、理想化された紳士らしさは、名誉ある人々を洒落者や偽善者から区別する、一種の社会審査の方法となった。その要諦は出自ではなく道徳性であった。だが、全ての新参者に徹底した道徳審査をほどこすことは不可能であったので、世間は外見に、つまり身なりや、わけても立居振舞に現われる外見の重視に、しばしば立ち戻るようになった。⁹

つまり、紳士という言葉が意味するものが、「社会的意味合い」よりも「道徳的意味合い」を重視するようになるにつれ、結果的には外見がより重視されるというパラドクスが生じたのである。

紳士という言葉の以上のような歴史的意味の変遷を踏まえて考えるなら、ピップの紳士への欲望の根源に、ハヴィシャム婦人とマグウィッチの人生を翻弄した似非紳士コンペysonが影を落とすことは実に暗示的である。そもそも、結婚詐欺に代表されるように、彼の犯した罪は詐欺と公文書偽造であり、要するに「偽物」を作ることである。従って、もし「紳士」なるものが、その根源において極めて曖昧で具体的な実態の不在をその特質とするならば、「見ばえ」を良くすることで自らを紳士に仕立て上げ、それによって社会を欺こうとするコンペysonの姿こそ、ある意味で「紳士」という言葉のあり方そのものの隠喩であるとも考えられるのだ。

とすれば、ピップ自身もコンペysonのダミーであると言えることができるかもしれない。彼はハヴィシャム婦人とマグウィッチを介して、「紳士」という実態のない言葉によって欲望を喚起され、それを追い求めるのであるが、その過程において正に彼が紳士としての「見かけ」に固執し、コンペysonの行為を繰り返すからである。ピップがこの悪循環から解放されるのは、オーストラリアからロンドンに舞い戻ったマグウィッチによって、全ての真相が明らかにされる時である。この瞬間、彼は自分の欲望の根源（過去）に存在し、かつ自分の目指すゴール（未来）において回帰するであろう不在としての紳士、コンペysonとしての自分自身の姿を直感したはずなのである。

このピップの幻滅が、彼にとっては同時に覚醒となり、これ以後新たな意味での「成長」が始まるのである。そしてこの彼の変化が、「心」を喪失したハヴィシャム婦人にそれを回復させ、死刑を宣告されたマグウィッチに最後の救いをもたらすのである。換言すれば、ピップがコンペイソンの呪縛、すなわち「見える」紳士への固執から逃れたとき、彼にそれを吹き込んだ「父」と「母」も、その呪縛から解放されるのである。

3 植民地人と労働者

十八世紀から十九世紀にかけてのイギリス中産階級の勃興を可能にした一つの大きな要因は、海外の植民地からもたらされた富とそれに連動するかたちで発展した商業システムであった。マグウィッチが流刑地オーストラリアから送った金によって、ピップが紳士への道を歩き始めることは、この歴史的事実の寓意として見ることも可能であろう。しかも上述したように、新興中産階級にとって紳士として社会的な認知を得ることは至上命令であり、この彼等の欲望が、いわば紳士の意味内容を実質的に生みだしたように、正にマグウィッチの欲望が実質的にピップを紳士へと導くのである。

紳士の実体が曖昧であるとしても、いや、正にそれゆえに、自らの社会的アイデンティティーに十分な自信を持ってない者、また明らかにそこから逸脱している者にとって、紳士なる言葉が激しい渴望を引き起こすことは想像に難くない。とすれば、紳士とは、紳士ではない者達によってつくられると言ってよいのかもしれない。事実、紳士として成長したピップの姿を初めて目にしたマグウィッチの歓喜はこれを裏付けるものである。

彼は、ピップが身につけている時計の金鎖や指輪一つ一つに触れ、それが紳士を構成する重要な部品であるかのように数え上げた後、次のように語るのである。

植民者の純血種の馬が、歩いているわしに泥をひっかけたとする。わしは何と
言うと思う。「おまえらなんか足元にも及ばない立派な紳士を、わしは作っ
てるんだぞ」とな、自分に言い聞かせるのさ。¹⁰

この部分は一つの比喻であり、「イギリス本国から来た血筋のいい連中が、わしに泥をひっかける（侮辱する）」という意味に解釈できる。マグウィッチは自分がそのような「血筋のいい」イギリス人から程遠い存在であることを十分意識するがゆえに、ピップを紳士として育てることに一層情熱を傾けたのである。とすれば、この言葉は、「植民者」(colonizer)に対する「被植民者」(colonized)の呪詛の言葉としても読めるはずである。

もちろん、マグウィッチ自身イギリス人であり、オーストラリアのアボリジニ（原

住民)ではない。だが、ヴィクトリア朝社会において、彼のような社会の底辺に生きる者が、異なる人種として表象されたことは既に多くの研究者が指摘するところである。例えば、アン・マックリントックは、当時広く流布した「退化」(degeneration)という言葉に注目する。この言葉はダーウィンの『種の起源』(1859)から発展した社会ダーウィニズムの副産物なのだが、ヨーロッパの白人成人男性が「人類」の進歩の最先端に位置するとすれば、女性や子供、また労働者や下層民、犯罪者や同性愛者らは、それより劣ったり、または進歩から逸脱してしまった存在とみなされたのである。¹¹

ここで、ピップがマグウィッチと初めて遭遇する場面、『大いなる遺産』の冒頭部分を思い出して頂きたい。マグウィッチはぼろをまとい、足には「大きな枷」をはめられ、「泥まみれ」で、「目をぎらつかせ、大声でうなる」。しかも怯えるピップに向かって、明日の朝までにヤスリと食料を持ってくるように言いつけ、それができないなら「おまえの腹わたを引き出して、焼いて食っちゃまうぞ」と脅迫するのである。このマグウィッチのイメージは脱獄囚というより、むしろ逃亡奴隷というべきものであり、しかも彼の最後の言葉はヨーロッパ世界が未開人に対して何世紀にもわたって押し付けてきたステレオタイプ、カニバリズムのイメージを彷彿とさせるのだ。

先に述べたように、教養小説の根底にあるのは普遍的な価値としての「人間性」とそれに向けての「成長」の可能性なのだが、『大いなる遺産』が明らかにするのは、結局、そのような「人間性」と「成長」は決して「普遍的」なものではなく、極めて限られた者だけが享受できる「特権」であるということだ。労働者階級に属する者や、また植民地の人間にはほとんど縁のない言葉なのである。しかし、より重要なことは、正にこうして排除された者達の存在や欲望こそが、それらの輪郭を明らかにし、その意味を充填するということである。

この点を理解する上で、マグウィッチと労働者階級出身のジョーは興味深い対照をなしている。物語の終り近く、ピップは多額の負債をかかえた上に病に倒れる。彼を献身的に看病し、その負債を全て払うのがジョーである。かつて労働者としての彼を軽蔑し、ロンドンへ旅立ったピップは、今や自分の愚かしさを知り、ジョーの好意に感謝して、彼を「この心優しくキリスト者」(“this gentle Christian man”)と呼ぶ。ギルモアはこの点について、“gentleman”という言葉の間に“Christian”という語が挿入されることによって、紳士という言葉が、非階級的な要素に分解され、それが愛と許しというキリスト教的理想によって生きる人として新たに意味づけられるのだとするが、¹²正にジョーこそはその内面的な徳ゆえに紳士とされるのである。

換言すれば、紳士への「成長」を自らの目標と定めたとき、ピップはジョーを否定し排除しようとするのだが、しかしそれゆえの後悔と自責の念は彼から消えることはなく、結局、「成長」が不可能となった正にそのとき、彼は逆説的に紳士のあるべき一つの姿、「見えない」紳士の真価を理解するのである。これに対して、マグウィッチの存在は最初の数ページを除いて、その後作品から全く忘れ去られるのだが、その

不在こそが彼の存在証明であったこと、つまり遠い植民地からピップを支え、操っていたことが最後になって暴露されるのである。そして、ピップはその事実を知ったとき、それまで自分が追い求めてきた紳士、「見える」紳士を否定するのである。

4 帝国と個人

遺産の真実が暴露された後、ピップは紳士への夢を捨て、ロンドンを離れてエジプトに支店を持つ商会に新たな職を求める。サイドはこうしたピップの選択をイギリスの帝国主義支配への参入とみなし、彼を「植民地商人」(colonial businessman)と呼ぶ。ただし、サイドはこの点をこれ以上深く論ずることはせず、ディケンズさえもが帝国主義というイデオロギーの時代性から自由ではあり得なかったと述べるにとどまっている。

おそらく問題とすべきは、ピップに起こった変化、すなわち、紳士への欲望とそれを可能にするかに見えた富が植民地からもたらされたことが明白になったとき、彼がそれを拒否し、自ら植民地へ赴き一人の商社員としての仕事を選択するという変化であろう。何故ならこのピップの行為は、それまで「見えなかった」植民地の存在が、はっきり「見える」ようになる転換点であるからであり、さらには、それが十九世紀的教養小説の特質、つまり社会と個人の克服し難い分離を端的に示すものでもあるからだ。

先に、十九世紀のイギリス社会が当時の他のヨーロッパ諸国に比べて安定していたというモレッティの意見を紹介したが、仮にそうだとしても、こと海外の植民地となると話は全く別であった。近くはアイルランドで、また遠くアジア・アフリカで、植民地支配に対する反乱が頻発していた。イギリスは武力によってそれを抑え込む一方、1877年のヴィクトリア女王によるインド女帝即位に代表されるように、多くの植民地を帝国の構成員として再構成しつつあったのである。

つまり、イギリス国内の安定は海外の植民地における帝国主義的支配を強化することで確保されていたのであり、国内で選挙法改正やパブリック・スクールでの中産階級への紳士教育にみられるような民主化が進んでいたとしても、それは階級対立を回避し、人々を統一的なナショナル・アイデンティティの下に結束させ、帝国をより効率よく機能させる役割も持っていたのである。

事実、『大いなる遺産』が誌上に連載された1860年から1861年は、制度面での民主化とは裏腹に、それまでの自由主義的な社会の風潮から帝国主義的な統制の時代への転換期でもあった。この点についてアン・マックリントックは次のように述べている。

1860年代以降、個人の成長や自己完成といった考え方に対する信念が揺らぎ始めた。啓蒙主義の思想が、個人の主体という観点から歴史を書き換えようとしたとすれば、十九世紀は、個人の成長を賛える英雄詩としての歴史観が、様々な

異議申し立てに晒されたのである。自由主義的な政策だけでは、もはや貧困の問題に対処することも、労働者階級の反乱に対する不安を鎮めることもできなかった。¹³

マックリントックはこうした社会不安の一つの原因として、上述したように「退化」という言葉に注目するのだが、この問題に対する人々の不安、特に中産階級の不安が、それを放置することが国民一人一人の健康と身体を損ない、ひいては帝国の身体(imperial body)をも破壊してしまうのではないかという不安へとエスカレートしていくのである。その結果、個々人の私生活、とりわけ衛生面と性への国家の干渉が容認されることになり、例えば健康な赤ん坊を産むために必要な「母性」が国家レベルで提唱されるようになるのである。

帝国の存続と発展が個人の自由に優先する社会の中であって、教養小説はその性格を変えて行ったのであり、ピップが紳士としての「成長」を断念し、植民地商人として再出発するのは、このイギリス社会の歴史的な変質を明確に反映しているのである。正に、それまではっきりと意識されることのなかった「見えない」帝国が、これ以後、イギリス社会のあらゆる場面で「見える」ようになるのである。

結び

『大いなる遺産』において、ハーバートの父によって定義されるような紳士、すなわち内面的な徳において紳士と呼ぶにふさわしい人物を一人選ぶとすれば、それが労働者階級出身のジョーであることに異論はないであろう。そして、このような人物を“gentle Christian man”として提示することによって、紳士という概念が脱階級化されるのだ、というギルモアの指摘は間違っていない。しかし、ここで注意しなければならないのは、紳士の範疇を労働者階級にまで広げていくことが、そのまま階級制度そのものや、またそこから生じる様々な矛盾や差別の解決に結び付くわけではないということと、紳士をキリスト者として捉え直すことで、結果的に非キリスト教徒が「紳士」のカテゴリーから排除されてしまうということである。

第一の点に関していえば、労働者階級の生活の理想化という問題がある。ピップがジョーを内面の紳士として再認識するとき、一旦は軽蔑し、そこから逃れようとしたジョーの鍛冶屋としての生活を今度は全面的に肯定し、できればその牧歌的世界へ回帰したいと願うのであるが、このような理想化が現実の社会問題を隠蔽し、既存の支配体制に対する批判の余地を奪ってしまうことは明らかである。事実、当時のイギリス社会の最大の不安定要素が労働者階級の反乱であったことを思い起こすなら、労働者階級を美化することが、当の労働者階級にとっては単なる気休めでしかなく、何ら本質的な問題解決にならなかったであろうことは想像に難くない。

第二の点については、ヨーロッパが植民地支配を押し進める大義名分が、野蛮な異

教徒をキリスト教徒に改宗させることであったということを示せば十分であろう。それは例えば世界の周縁にある「未開な」地域にイギリスの文化を広めることと同義であり、紳士こそその文化を体現する具体的イメージとされたのである。

こうした点を考慮するなら、『大いなる遺産』が世に出た時期を境に、イギリス社会が自由主義から帝国主義へと変質していくことは興味深い偶然と言わざるを得ない。ジョーのような内面の紳士を賞賛することは、ある意味で国内の階級間の分裂を回避し、国民一丸となって帝国主義体制を支えるシステム作りに資するだけでなく、非キリスト教徒＝非紳士としての膨大な数の植民地の人々に対する差別意識の素地ともなったはずなのだ。換言すれば、ピップが「見えない」紳士を受け入れる時、皮肉にも、当時のイギリス社会において、それまで「見えなかった」帝国が「見える」ようになったのである。

出典：久田晴則編著『文化のカレードスコープ - 英米言語・文化論集』（英宝社、2003年）163-76.

注

¹ Franco Moretti, *The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture* (London: Verso, 1987), p. 62.

² Moretti, p. 185.

³ Edward W. Said, *Culture and Imperialism* (London: Chatto & Windus, 1993), p. xv-xvii.

⁴ Charles Dickens, *Great Expectations* (London: Oxford UP, 1960). 本文からの引用は全てこの版に拠る。尚、日本語に訳すに際して、山西英一訳、『大いなる遺産』（新潮文庫、1988）を参考にした。

⁵ ペネロピ・J・コーフィールド、松塚俊三・坂巻清訳、「イギリス・ジェントルマンの論争多き歴史」、『思想』1997, 3, p. 68.

⁶ コーフィールド, p. 74. 尚、日本語訳は原文を参考に多少変更した。cf. Penelope J. Corfield, "The Rivals: landed and other gentlemen", *Land and Society in Britain, 1700-1914* (Manchester: Manchester UP, 1996), p. 14.

⁷ Robin Gilmour, *The idea of the Gentleman in the Victorian Novel* (London: George Allen & Unwin, 1981), p. 8.

⁸ 村岡健次、「『アスレティシズム』とジェントルマン-- 十九世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて」、村岡健次、鈴木利章、川北稔編、『ジェントルマン・その周辺とイギリス文化』（ミネルヴァ書房、1987）p.237.

⁹ コーフィールド, p. 75.

¹⁰ Dickens, p.306.

¹¹ Anne McClintock, *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest* (NY: Routledge, 1995), p. 41.

¹² Gilmour, p. 143.

¹³ McClintock, p. 48.